



随想 二題

會員 市野瀨 仁

番 匠 川

自報車を盗まれたので、思いきって新車を買った。新車に乗って街を通ると、晴着を着たような、おもしろい気がする。

今日は夏休み初の初日で、梅雨晴れのよい天気だ。文化会館の階段下まで乗りつけて、ガッツと銚子をかけて城山に登る。

番匠川の水面が、鏡のように静かだ。はるか上流から、番匠川は、ゆるやかな曲線を描いて、難の山麓を流っている。兩岸に沿った濃い緑の高水敷（河原）は、帯のよう

うに流れる川をあでやかに引き立てている。白い点、赤い点が動く。人の子が遊んでいる。日氏等距離に架かる長い四つの大橋は銚子かいたように美しく、平和である。

独歩はこの川も、あの橋も見ていない。独歩の目にはこの川は映らなかつたのだ。

炭盛を佐伯の地に、昔の三倍もある中の、大きな川を造った人間の力はすばらしい。市街から南へ、遠くに流れをかえた人間の技術はたいしたものだ。

銀毛の橋を架け、兩岸を美しい緑の公園にした人間の

審美眼に感心する。

これが百年に一回くるかもしれぬ大洪水との挑戦の策である。

私は思う。

「今車が走っている堤防の下は、零メートルに近い、水田や住宅群がある。そこだけではない。佐伯地方の沖積平野は、すべて幾千年かかって作った、川の領分であることを忘れてはならない」ということを。

私は、新車を十年位は乗りたいものだと思ひながら、護国寺部落の展望台へとペダルを踏んだ。

松

玄海国立公園の中ほど、糸島半島の西北端にあたる志摩の海岸は、白沙青松あり、岩場あり、リヤス式海岸として変化に富み、玄海国立公園随一の絶景とされている。

「国民宿舎茶屋」は日海水浴場を眼下に、左に岩場、右手に白沙青松がひろがるあたり、茶屋の大障を望み、その果てるところは遊覧たる玄界灘を一望におさめるところだ。

以上は、ご案内の文章の一部分である。

スインプル有蛇物に、趣味のよいデザイナーの室内装飾は心地よい。その上料金も安く、福岡県でも評判のよい国民宿舎ときいてはいる。

三年ぶりに訪ねてみると、砂浜には海水浴場の施設が所せましと建ち、青く美しくかつた松の枝は、赤く焼けたがれ、炎天下にうなだれている。

翌日の帰途、津寧に

「松喰虫には、何か手を打っていただきますか」と尋ねて来た。別にしている様子はありません。とくに今年になってはどくすたようです」と言う。私は、白砂青松の文窓にバツ印をいれたい。佐伯の松で国民宿舎を後にした。車の中で、しばらく、佐伯の松、大分の松を思い浮かべていた。

頼山陽の詩に「松」と題した絶句がある。

歳年養就 老境鱗
深壑峙為 竟一吟
免得庸工 加刻削
万層雪底 歲寒心

長い洞かかって苔でた老松は、深い谷間にあって、時折竟が一吟でもする。ように木戸を穿するものである。これも要するところ、技術の拙い木工に刻削されることまぬかれ、その上、幾層も雪の底に埋れて、寒い冬は、季節に堪える心を忘れぬか、友からである。(深田岩重 跋)

先人は、崇敬のシンボルとして松を詠み、松を子孫に残してくれた。

現代人は、無惨に消えゆく松に、慨嘆の詩しか致さず、手を拱ぬいているとは、何とその罪重く、淋しい限りではなからうか。

(NHK「くらしのたより」投稿原稿・放送済)

山田俊 卿伝

卿上の週刊新聞の一つ「鶴谷産報」に、井上龍次郎先生が書かれていた「矢野龍雄先生伝」は、連載一百三十回、去る十月十四日に終った。資料の蒐集整理もやることをながら、当時の甘情と龍溪の人物についての論述と批評の透徹さには、佩服の外はない。

引つぎ今度、「山田俊卿伝」を書かれて第三回になる。山田俊卿先生は、米津村宮内備に生まれ、医学を修めて身を軍籍におき大成された方、そして心学知性の道を開いて有るである。御期待申し上げよう。(H)

研究

佐伯と国木田独歩

そのころの毛利家

山本

保

「欺かざるの記」の一部を掲げます。

明治二十六年十月二日

午前中、中根氏を訪ふ不在。蓋し氏と共に毛利氏を訪ふんとてなり。坂本永年氏来る。午後三時鶴谷学館に行き、幹事の諸氏と学課の事に就き相談する所あり。

註 ① 中根氏→中根謙直、毛利家忍取師役、当時令の馬場区居住。

② 毛利氏→旧佐伯藩主、毛利重就、鶴谷学館経営主、当時警務課長。

③ 坂本永年→鶴谷学館館長、山手通り、後独歩が下宿した佐伯。

④ 赴任当初は、向島の月水旅館であった。

⑤ 令の中安五郎新座敷にあり。

九月三十日鶴谷学館教師として佐伯へ赴任した独歩は、

十月二日挨拶をかねて毛利邸を訪問しています。

同十一月三日

天長節にして学校は休みなり。

午前中二と共に女島の野らに散歩す。日暮かして小春の季節なり。

午後四時より警務館に出発す。毛利氏の邸に開か